http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.072　12/09/19

墨汁つれづれ

●●さんが墨汁の協力を求めていたので、早速国語科に残っていた卒業生の忘れ物を寄付した。しかし、「家に墨汁がある人というのはいるものなのだろうか？」「中学の時に書道の授業があったのだろうか？」などと考えてしまった。さて、どうなんでしょう？

日比谷の芸術選択では、17・18Ｒが音楽・美術クラスである。間もなく配布されるだろう星陵祭のパンフレットでも、「欄外アンケート」の「日比谷生についての予備知識」のコーナーにこのことが触れられていて、

「書クラ＝書道クラスの略。芸術の授業での書道選択者がいるクラスのことで、各学年の○７Ｒ、○８Ｒがこれに当たる。クラス替えの時のメンバーの入れ替えが少ないせいか、書道選択者の性か、他のクラスとは違った団結力を持つ」

と書かれている。ふむふむ。

だから、17･18Ｒの人は墨汁を持っていそうだが、そうでない音楽・美術クラスの我がクラスでは、家に墨汁がある人は少ないのではないかと思ったわけである。

ちなみに、私は高校時代音楽選択であったから、墨汁とは一切関係がない。主人も音楽選択だったようだが、個人的に書道は習っていて、有段者のようである。ただ、この書道の有段者というのは、その流派（会派？）の中での認定らしくて、どうも怪しい部分があるらしいが…。

私は中学校で書道をやったかどうか記憶がないのだが、小学校のころは授業でやった記憶がある。ただし、墨汁を使うなどというのは「もってのほか」という雰囲気があって、授業のたびに硯で墨を摺った。しかも、その摺り方までが決まっていて、硯に対して墨を垂直に立てて摺らなければならず、墨の摺り口が斜めになったり、丸まったりすると、怒られたような気がする…。つまり、墨を摺るという時から書道が始まるわけで、きっちりと摺りながら精神を書に向けて集中していくという感じであった（ホントかな？）

＊

平成19年のセンター試験の小説の問題は、堀江敏幸の「送り火」が出典である。これはなかなかイイ短編小説で、私も自分の関係している教科書の候補教材に推薦した。現在では新潮文庫『雪沼とその周辺』で簡単に読めるから、興味のある人は立ち読みしてみてほしい。（ただし、かなり玄人受けするタイプの小説で、味わい深い分、表面的にしか読めない人には、面白くないといった印象になってしまう可能性もあるが…）。

この作品は、主人公「絹代さん」が、子供向けの書道教室を開いている「陽平さん」に惹かれていく様子を、優しく静かな筆致で描いた名作であるが、その中に墨の香りの話が印象的に出てくるのである。もうスペースがなくて引用できないが、ちょうどセンター試験でもその箇所から出題されているので、機会があったら読んでみるといいだろ。確かに、墨を摺っている時、独特の香りが匂い立つ。それもまた書道のイイ所である。